

福澤諭吉 と 勝 海舟

～四つの戦争に対する二人の態度～

大久保啓次郎

要旨

幕末から維新を経て、明治 30 年代初期まで活躍した二人を、二人が関係した四つの戦争を通して、二人の生き方・考え方を考察し、二人が開国期の日本の「掃除破壊と建置経営」¹に如何に関与したかを解明した。

二人の生涯を考えると、福澤は思想家であり、勝は政治家なので、それぞれが、思想を形成したり、行動を起こしたりする時の、出発点とする立場が異なり、同列で二人の人物を語る事は適当ではない。しかし、二人が関係した最初の二つの戦争の時は、二人共幕臣であり、幕臣としての立場で考え、行動していた。

明治維新以後では、福澤は思想家であったが、勝も赤坂の氷川に引き籠って、評論家的活動をしていた。したがって、最後の二つの戦争の時も、二人共、ほぼ同じ立場であった。

その結果、幕末・維新で「掃除破壊と建置経営」に貢献した人は、勝海舟であり、維新以後明治時代で「掃除破壊と建置経営」に貢献した人は、福澤諭吉であると結論づけた。

1. はじめに

福澤諭吉と勝 海舟は二人共、生涯に於いて四つの大きな戦争に関係している。第二次長州征討（幕府と長州の戦争）、維新戦争（幕府と薩長の戦争）、西南戦争（明治新政府軍と西郷隆盛らの旧薩摩藩士族の戦争）、日清戦争（日本と中国の戦争）、の四つである。

この四つの戦争に対して、福澤が執った態度は下表の通りで、第一には促進的、第二には傍観的、第三には否定的であったが、第四の場合には非常に煽動的な行動を執った。

これに対して、勝が執った態度は下表の通りで、第一には阻止的、第二には終戦的、第三には消極的であったが、第四の場合には極めて厭戦的であった。

このように、維新前は同じ幕臣であり、維新後は思想家と評論家であった福澤と勝の

二人は、上記四つの戦争に対して、悉く相反する態度を執った。以下、それぞれの局面での二人の態度を考察し、その違いを解明する。

四つの戦争	年 号	西 暦	福澤諭吉	勝 海舟
1. 四境戦争	慶応 2 年	1866 年	促進的	阻止的
2. 戊辰戦争	慶応 4 年	1868 年	傍観的	終戦的
3. 西南戦争	明治 10 年	1877 年	否定的	消極的
4. 日清戦争	明治 27-28 年	1894-95 年	扇動的	厭戦的

2. 四つの戦争に対する二人の態度

2-1 第二次長州征討（四境戦争）

（福澤諭吉）

福澤諭吉は 1862 年ヨーロッパからの帰航の船中で、後に大名同盟論として議論される維新改革の一方策のような説を口にした（福澤諭吉『福翁自伝』の「王政維新」の項。以後、単に『自伝』と表記する）が、帰国後 2, 3 年の国内情勢の推移（尊王攘夷思想が強くはびこる時世）を見て、この難局を乗り切るには、幕府の権力を強大にする「大君のモナルキ」＝「將軍の君主制」しかないと考えようになる。²

そして慶応 2 年（1866 年）7 月 29 日、「長州再征に関する建白書」³を、幕府の長州再征に際して、木村摂津守に提示する。木村は 9 月 6 日京都で、老中小笠原長行にこれを提出する。

福澤の意見は突飛なものではなく、当時の幕府内部の有力な意見とも合致していた。建白書の内容は、フランスから資金と軍隊を借りて、長州を倒し、ついで薩摩も倒し、朝廷に圧力をかければ、幕府に楯突く勢力は消滅し、幕府中心の絶対的中央集権国家が確立される、というものであった。

しかし、フランス公使ロッシュの仲介で、小栗勘定奉行や栗本外国奉行が、フランス本国と交渉するも、フランス側の事情により、この話はご破算になる。そして、第二次長州征討は、幕府側の敗退により長州と停戦せざるを得なくなり、海舟がその交渉をする事になる。⁴

（勝 海舟）

勝 海舟は 1862 年頃には、松平慶永―横井小楠の影響を受けて、幕府の「私」の政治を否定し「公」の政治を主張。公武合体・雄藩連合による国家の統一を考えていた。1862 年 8 月に坂本龍馬と、1864 年 9 月に西郷隆盛と、初対面し「幕府に天下の政治は無理、これからは幕府と雄藩連合で国政を行うべし」⁵と訴える。したがって、勘

定奉行の小栗忠順と老中板倉勝静から、長州再征に当たり福澤の「建白書」の内容のようなものを聞かされるが、「真に日本の事を考えるなら、徳川氏が自ら倒れ、自ら領地を削って、国政を担当する能力の有る者が政権を担当するように力を尽くすべきである。薩長を憎み、これを倒すなどとてもない事である。」⁶と意見する。

こうして勝は、長州再征をフランスとの軍事的提携によって貫徹しようとする小栗、栗本らに対して、真っ向から対立する。

2-2 維新戦争（戊辰戦争）

（福澤諭吉）

長州再征が幕府の敗北に終わると、福澤は幕府に対してもはや一縷の望みも持てなくなり、慶応3年（1867年）になると、公然と幕府打倒を口にするようになる。⁷ 何故幕府にも薩長にも加担しなかったかの理由を、福澤は『自伝』で以下のように述べている。「第三、東西二派の理非曲直はしばらくさておき、男子がいわゆる宿昔青雲の志を達するは、乱世にあり、勤王でも佐幕でも試みに当たって碎けるという書生のことであるが、私にはその性質習慣がない」と。

福澤の維新戦争に対する態度としての本音であろう。

福澤は、これ以後政治との間に距離を置き、幕府にも薩長にも迎合せず、後進の教育に取り組むことになる。

そして慶応4年＝明治元年（1868年）5月15日、上野で官軍と彰義隊の戦いがあつた日、芝新銭座の慶応義塾に於いて、福澤は遥かに砲声を耳にしながら、我関せずで、ウエーランドの経済書の講義をしていた。

（勝 海舟）

第二次長州再征に失敗した幕府は、慶応3年（1867年）10月に大政奉還をするが、薩長を中心とした倒幕派はこれを無視して、12月に王政復古クーデタを企てる。

これに対して幕府は、慶応4年＝明治元年（1868年）1月、西郷の挑発に乗せられ、薩長に対して鳥羽・伏見の戦いを挑むが、敗北を喫する。初戦で徳川慶喜は戦意を喪失し、軍艦開陽丸で江戸へ逃げ帰る。

1月23日に陸軍総裁に昇格した勝 海舟は、2月11日に慶喜主導の徳川家首脳会議で「慶喜恭順」の方針が決定するや、薩長を中心とした倒幕派（官軍）との交渉を任される。

徳川の「私」の巣窟を一掃しつつも、徳川の威厳を保持する為には、官軍との主戦論を断固排除して、話し合いに持ち込まねばならないと考えた勝 海舟は、薩摩と親密なイギリス公使パークスを巧みに利用して、西郷隆盛との江戸無血開城談判に成功する。

しかし、一戦も交えず官軍に敗れたのは、「数百千年養い得たる我日本武士の気風を

傷うた」(福澤諭吉『瘠我慢の説』)として、後年、福澤諭吉から厳しく批判されることになる。

江戸無血開城は実現したが、海舟には一大名としての徳川家の処遇という課題がまだ残っていた。海舟は、「慶喜恭順」の実績によって、徳川家の処遇は寛大に決定されるだろうと考えていたが非常に厳しく、官軍から、慶喜の居城は江戸ではなくて駿府で、禄高は今までの 400 万石から 70 万石にすると発表される。海舟は 200 万石か、少なくとも 100 万石を期待していたので、この発表は彼にとって全くの想定外であった。

慶応 4 年＝明治元年 (1868 年) 5 月 15 日、福澤諭吉が上野戦争の砲声を耳にしながら慶応義塾で講義をしていた時、勝 海舟は徳川一門の家 (田安家) にいて、命拾いをしたとはいえ、官兵に私邸を略奪されていた。

2－3 西南戦争

(福澤諭吉)

明治 10 年西南の役の場合には、福澤は徹頭徹尾、この戦争に反対であった。

福澤諭吉と西郷隆盛とは生涯に於いて、互いに一度の面識もなかったが、西郷は福澤の著書を常に愛読して常にその議論識見の卓越している事を賞賛していたし、又福澤は西郷の人物精神を尊重してこれを一世の人傑と認めており、両者の間には互いに敬慕の念があったものと推察される。

明治 10 年 2 月、西郷が兵を率いて鹿児島を発したとの警報があった時、福澤は筆を執って「西郷が兵を率いて暴発したのは不問に付する事は出来ないが、彼にも言い分があるのであろうから、その言わんとするところを聴かずして直ちに征討令を発するのは、維新第一の功臣たる西郷に対する処置としては甚だ忍びない」⁸という建白書を出そうとしたが、時期を失して間に合わなかった。

そこで福澤は更に筆を改めて、「一時休戦して、臨時裁判所を開き鹿児島士族の名代人を召喚して、一般の傍聴を許した公開の法廷にて、その言わんと欲するところを述べさせ、公平至当の審判処分を下さん事を希望する」⁹という趣意の建白書を認め、義塾の教員須田辰次郎に持参させ、中津士族 5 名の連署で京都の行在所に捧呈させた。

福澤は、何とかしてこの戦争を最後の土壇場まで追い詰めぬ段階で、停止させようと努力したものと思われる。西南の役の落着後、直ちに筆を執って『丁丑公論』を脱稿し、西郷隆盛の明治維新での功績を称えた。

(勝 海舟)

勝 海舟と西郷隆盛とは、1864 年 9 月と 1868 年 3 月に、歴史的会談をしており、お互いに尊敬し合う仲であった。

明治 10 年に西南戦争が勃発した時に、海舟には起ちあがって西郷を応援したい気持

ちが充分あったと思われる。海舟と西郷は相重んじた仲であり、又海舟は新政府の専制政治にも不満を持っていたからである。しかし海舟が旧幕府を扇動して、旧知の部下がいる海軍にも働きかけて西郷と呼応したならば、どのような事態が生じたであろうかは、容易に想像し得るところであった。したがって、海舟は起たなかった。起たないどころか、連日連夜奔走して、旧幕臣が反乱軍に身を投ずるのを未然に防いでまわった。

その結果、旧幕臣からは、反乱軍に馳せ参じた者はいなかった。この点を江藤淳は、高く評価して『海舟余波』で、「旧幕臣グループの、隠然たる力を新政府に示す事、これこそ明治 10 年の危機に当たって、海舟が試みた事であった。」と言っている。

このように、海舟は西南戦争では、西郷に救いの手を差し伸べなかったが、明治 12 年 6 月、南葛飾郡浄光寺境内に、私費で西郷の記念碑を建立したり、西郷の遺児である寅太郎のために、洋行留学費を宮中から出させるために奔走したり、西郷のために粉骨砕身し、真心を尽くしている。

2-4 日清戦争

(福澤諭吉)

朝鮮に関して福澤は、時事新報に掲載された最初の朝鮮論で、次のように、語っている。

「明治維新以来、日本は西欧を手本として文明開化に取り組んで来た結果、国民の気力も旺盛で文明の進歩も甚だ速やかで、我が国は早くも東洋に於ける文明国の魁となったが、東洋の全面を見渡せば西欧諸国の圧力ますます強い中、東洋に於いて僅かに独立の形を保っているのは支那と朝鮮のみである。その支那は頑迷固陋にして世界の大勢を知らず、朝鮮は徒に孤立逡巡して排外の気風のみ強く西力東漸の火の中にあって、正に藁屋根同然の抵抗力のない有様である。日本は自国独立の自衛上どうしても朝鮮を誘導しこれを堅固な建物とし、三国相提携して火災の蔓延を防がねばならぬ」¹⁰

しかし、日本が朝鮮の文明化に力を注いでいる時に、これを妨害しようとしているのが清国である。したがって清国に戦争で勝利して朝鮮への干渉を止めさせなければならない。日清戦争はそのための戦争である、として時事新報で下記のように訴える。

「戦争の事実は日清両国に起こりたれど、根源を尋ねれば、文明開化の進歩を謀るものと、進歩を妨げんとするものとの戦いにして、両国間の争いにあらず。本来日本人は支那人に私怨なく敵意なし。世界の一国民として普通の交際を望みたれど、彼らは頑迷不靈にして文明開化を悦ばず、反対に妨げんと反抗の意を表したるが故に、止むを得ず事のここに及びたるのみ。」¹¹

福澤の軍事上の積極性は、領土的な野心によるものではない。清国に対して決定的な勝利なくしては実効無しとする判断と、清国の朝鮮干渉を根絶せんがためであった。

こうして時事新報の社説に連日筆を執ったのは勿論のこと、軍費寄付運動を起こし、

自ら金壹萬円を投じて「国民奉公」を奨励した。

そして、日清戦争に勝利すると、下記のように喜びをあらわにした。

「・・・日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも有難いとも云いようがない。命こそあればコンな事見聞するのだ、前に死んだ同志の朋友が不幸だ、アア見せて遣りたいと、毎度私は泣きました。」¹²

(勝 海舟)

勝 海舟は徹底した日清戦争反対論者であった。その理由を説明する資料は勝 海舟の『氷川清話』である。勝の非戦論の由来の一つは、幕末に於ける勝の、「日清韓三国合縦論」にあったと考えられる。¹³

これは『氷川清話』の中で語っている一節であるが、文久 2 年に軍艦奉行に登用された勝は、「宜しくその規模を大にし、海軍を拡張し、営所を兵庫・対馬に設け、その一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三国合縦連衡して西洋諸国に抗すべし」¹⁴と、14 代将軍家茂に提言し、翌年の文久 3 年に採用され、神戸海軍操練所が開設された。

この勝の日清韓三国合縦論は、元治元年（1864 年）に、勝が軍艦奉行を罷免され、さらに翌年に、神戸海軍操練所が廃止された事により挫折するが、維新後も勝の内面に深く定着して、それが日清戦争に対する勝の態度決定に大きく影響したと考えられる。

このような勝の非戦論は、戦争の結果が日本に有利になっても変らなかった。勝にとって日清戦争は、日本の勝利にも拘らず、西南戦争とともに明治維新後の日本が犯した二大失敗の一つであった。¹⁵

勝は、むしろ日清戦争に於ける日本の勝利がもたらす影響を憂慮した。日清戦争後に予想される急激な軍備拡張、それがもたらす国民への過重な負担を憂慮したのである。そのことは、西南戦争後の国内に於ける激しいインフレーションで国民は既に経験済みであった。勝は、海軍主義者であったが、軍事を考える場合に、常に財政との関連を忘れなかった。¹⁶ しかも、日清戦争の戦中戦後を一貫して勝が非戦論を主張した根底には、日本の国益を図る政治的計算とは別に、清国及び朝鮮の人間と文化に対する、深い洞察と畏敬があったと思われる。例えば『氷川清話』の中で、清国についてこう述べている。

「支那人は一体気分が大きい。日本では戦争に勝ったと言って大騒ぎをやったけれども、支那人は、天子が代わろうが、戦争に負けようが、殆ど馬耳東風で平気である。社会というものは国家の興亡には少しも関係しないよ。」¹⁷

又、朝鮮に対する態度についても、当時から蔑視的な朝鮮観が日本において支配的になりつつあったが、その時流に勝は関与しなかった。『氷川清話』でこう述べている。

「朝鮮といえば半亡国だとか、貧弱国だとか軽蔑するけれども、俺は朝鮮も既に蘇生の時期が来ていると思うのだ。」「しかし朝鮮を馬鹿にするのも、ただ近來の事だヨ。昔は、日本の文明の種子は皆朝鮮から輸入したのだからノー。」¹⁸

このような朝鮮観に照らして考えると、勝が日清戦争後における日本の朝鮮に対する内政干渉政策を非難した所以も、容易に理解出来る。

3. 四つの戦争で二人が執った態度についての考察

3-1 第二次長州征討（四境戦争）

第二次長州征討で福澤が執った態度から、福澤が終始幕府寄りであった、と判断出来ないのは明白である。「門閥制度は親のかたきでござる」（『自伝』の「幼少の時」）と、福澤が言っているように、幕府に加担したくなかったが、「攘夷の旗」を掲げている、（と福澤は維新前には信じていた）薩長には、幕府以上に迎合する事は出来ず、その時点では、「開国の旗」を掲げている幕府に加担したのである。

これに対して、勝が執った態度は、明確な持論である、公武合体・雄藩連合による、日本国家の統一に基づくものであった。

3-2 維新戦争（戊辰戦争）

維新戦争での福澤は、幕府にも加担出来ないが、攘夷派の薩長にはもっと加担出来ないと言い、両者に均等な距離を置いて、いずれにも深くコミットしない態度を執っている。事実、『自伝』では、「誰かが幕府を倒して欲しい」と思っているが、「おれらは自分でその先棒になろうとは思わぬ」と言い、「攘夷派の薩長にだけは倒して欲しくない」とも述べている。このようなことから、「維新の際、悠々平日と異なるところなく、理を講じ書を読んでいたという事実を以って、福澤先生はその性格に於いて、根本的に実践的タイプでなかった」¹⁹とする論者もいる。

筆者もそのように考えるのが穏当かと思う。

一方で富田正文は、「幕府と薩長の戦いは、畢竟するに国内の問題であり、いずれは落ち着くべき所に落ち着くであろう。しかしその落ち着いた暁に日本は何れの方向を目指して進まねばならぬか。国内に於ける同胞相克の悲劇の幕が下りた瞬間に、日本の独立の危機という更に大きな悲劇の開幕のベルが鳴り響くの虞なしとは、当時の何人も断言出来なかったのである。したがって、福澤先生は、幕末の末年より明治の初年にかけては、国内的な政治の動向よりは、寧ろ日本全体としての諸外国に対する国際的地位を、より重要視した観がある。」²⁰と言っている。

富田正文は、あたかも福澤がこの戦争に第一等の関心を持っていなかったかのように論評している。しかし、この見解は穿ち過ぎの感を拭えない。

勝 海舟の態度は、「日本国家の統一」を目指したものであり、明確に理解出来る。

さてここで、不可解なのは、維新成って後に福澤が、『瘠我慢の説』で勝を批判し、

勝はかつての敵であった明治政府から爵位をもらって得々としている、と言い立てて、あまつさえ、勝が命がけで成し遂げた江戸無血開城の処置ともどもに、武士道精神を傷つける行為と断じた事である。

しかし『瘠我慢の説』に対する世間一般の評価は、賛否両論で真っ二つに割れている。この原因は、福澤が考える「公」「私」と、勝が考える「公」「私」の考え方が、違うからである。

勝は『氷川清話』で「徳川幕府あるを知って、日本あるを知らざるの徒は、まさにその如くなるべし。唯百年の日本を憂ふの士は、まさにかくの如くならざるべからず。」²¹と言って福澤諭吉を批判している。

福澤の政治思想が公と私の対置を軸に展開されること、両者の間に絶えざる緊張関係を前提とすること、そして、私のいっそうの充実を何よりも価値あるものと認めていること、等は認めるが、どうしても勝の江戸城無血開城（維新安定期の栄耀栄華に対する批判は別として）を非難する福澤の考えは筆者には理解できない。強固な私の存在が往時の日本に不可欠であり、「日本国抵抗の精神の保存」が喫緊の課題であったことも十分わかる。しかし、より強固な私の保存こそ大切とはいえ、無事の江戸市民が大きな犠牲を強いられることが確実であった江戸城決戦をしてまでもと、福澤はなぜ無理な注文を勝に投げかけたのか筆者には理解できない。たとえそれが、あるべき私の表象としての「決戦」であったとしても、福澤はそれを言うべきではなかった。²²

富田正文は、『瘠我慢の説』で主たる批判の対象となったものは、勝、榎本の維新後の進退である事は、いふまでもない。（『福澤諭吉の人と思想』200頁）と言っている。

3-3 西南戦争

西南戦争での両者の態度は、馬鹿な戦争を止めさせようとする福澤の態度と、応援もしないが止めさせようもしない、成り行き任せの冷ややかな勝の態度は、立場上で、「否定的」と「消極的」となるが、大いに理解出来るところである。

しかも、西郷隆盛の人徳で、福澤も勝も後世に西郷の偉業を伝えるために、福澤は『丁丑公論』を著し、勝は記念碑を建立するなど、西郷の名誉回復に貢献している。

3-4 日清戦争

日清戦争での両者の態度は両極端である。

「朝鮮の文明化」を急がなければ、日本が西欧の植民地になる危険性があるとして、「朝鮮の文明化」を妨害する中国に対して「これは義戦である」と主張して、戦争を仕掛けた日本を、福澤は積極的に支持したが、妥当な行動であったと考えたい。

しかし、朝鮮の「内政改革」をやったり、鉄道を設置するなどのインフラ整備の充実を図ったり、教育や新聞発行などの「精神文明」の移入を実施したが、「朝鮮人の心」

を捉える事が出来なかった。朝鮮の「国体」(ナショナリティー)に関わる問題であり、他国を文明化することが如何に難しいかという課題を残した。それにもかかわらず、日本は、日清戦争で中国に勝利した後は、更に朝鮮の文明化に関わって「内政干渉」を行い、その後「日韓併合」と進み、実質的に朝鮮を日本の植民地にした。日本は福澤の文明化という考え方から逸脱した方向に朝鮮を導き、その後中国も侵略し戦争を拡大して行った。

これに対し、勝の日清戦争反対の態度は、明治 27 年に至る過程での勝の東洋政略論が見えない。

このような状態では、「日清韓三国提携論」を勝が主張しても、それは「理想論」で終わったであろうと予想される。しかし勝の「清国及び朝鮮の人間と文化に対する深い洞察と畏敬」が朝鮮統治に活かされていれば、朝鮮の文明化は成功したかもしれない。

4. おわりに

福澤諭吉は勝 海舟よりも 12 歳年下であるが、二人共明治元年(1868 年)を基点としてそれ以前に 30 数年、それ以後に 30 数年生きている。

四つの戦争に対する態度から、明治元年よりも前(幕末)に功績を残した人は、勝 海舟で、明治元年よりも後に功績を残した人は、福澤諭吉であると考ええる。

幕末時代、勝海舟が幕臣に取り立てられた時期は、諭吉よりも早く、1864 年 5 月には軍艦奉行に昇格していた。福澤諭吉が翻訳御用に任用され幕臣に取り立てられたのは、元治元年(1864)10 月で、以後 2 年数カ月(1864~66)にわたって幕臣を務めた。

前節 2-1 でも述べたように、1860 年(アメリカ)、1862 年(ヨーロッパ)、の 2 回の洋行で、福澤諭吉は、{これから日本の文明開化を推進するには、「大君のモラルキ」でなければならず、「大名同士のカジリヤイ」(大名同盟)では一国の文明開化を妨げる。}²³ と、当時諭吉が抱いていた政体論を語っている。

1862 年~63 年幕府内には二つの政治方針があり、一つは徳川慶喜主導の幕政であり、もう一つは、横井小楠が主張する公武合体・雄藩連合による政治であった。勝 海舟は、横井小楠の影響を受け、公武合体・雄藩連合による日本国家の統一を考えていた。福澤諭吉は、上記のように幕府主導の政治を主張していたのである。しかし、1867 年に、福澤諭吉が上司の小野友五郎と共に再度アメリカに行く過程で、二人の意見が衝突したのを契機に、諭吉の心は完全に倒幕気運に傾斜していく。

維新直後に福澤は、「とてもこの有様では国の独立は難しい。」と思い、その時の心事を「実に淋しい有様であった。」と、この頃の事を、『自伝』の(明治政府を攘夷政府と思いこむ)の項で告白している。

然るに、明治政府が開明的政策を次々と断行するのを見た福澤は、年来の懸念を払拭した思いで大いに喜んだ。その時の喜びを、福澤は以下のように言っている。

「当時吾々同友は、三五相会すれば即ち相祝し、新政府の此の盛事を見たる上は死するも憾みなしと絶叫したるものなり」²⁴

福澤諭吉の本来的活動は、明治5年2月に発刊された、「学問のすゝめ」初編から始まった。福澤諭吉の文章に「掃除破壊と建置経営」（『福澤諭吉全集』第20巻）という言葉があるが、それ以後福澤諭吉は、「一身独立して一国独立する」（独立自尊）を目標に、日本を文明化するために、古いシステムを破壊して、次々と新しいシステムを構築して行った。

逆に、勝海舟は、幕末（維新前）に「掃除破壊と建置経営」を実行したと言える。それは「四つの戦争に対する勝の態度」に表れている。勝は、明治時代には、新政府に仕えた時期もあったが、実質的には赤坂の氷川に引き籠り、評論活動をしていた。

四境戦争と戊辰戦争で建設的な態度を執ったのは、勝海舟で、西南戦争と日清戦争で建設的な態度を執ったのは、福澤諭吉であった。

1 「掃除破壊と建置経営」は、福澤諭吉が使用したフレーズで、「古いものを壊して新しいものを建てる」という意味である（『福澤諭吉全集』第20巻243頁）。

2 以下の福澤の書簡を参照のこと。慶応2年（1866）11月7日付英之助宛書簡、『福澤諭吉全集』（以下『全集』と表記する）第17巻、31頁。

3 『全集』第20巻、6頁。

4 石井孝『勝海舟』吉川弘文館、2000年、116頁。

5 松浦玲著『勝海舟』中央新書、1997年、28頁。

6 松浦玲、前掲書、147頁。

7 『福翁自伝』（以下『自伝』と表記する）慶應義塾大学出版会、2001年、169頁。

8 富田正文「戦争と福澤先生」、福澤先生研究会『福澤諭吉の人と思想』、岩波書店、1940年、200頁。

9 福澤先生研究会、前掲書、201頁。

10 「朝鮮の交際を論ず」『時事新報（明治15年3月11日付）』（『全集』第8巻28頁）。

11 「日清の戦争は文野の戦争なり」『時事新報（明治27年7月29日付）』（『全集』第14巻491頁）。

12 『自伝』318頁。

13 勝海舟『氷川清話』講談社学術文庫、（2006年）、269頁。

14 勝海舟、前掲書、219頁。

15 勝海舟、前掲書、269頁～288頁。

16 勝海舟、前掲書、282頁。

17 勝海舟、前掲書、275頁。

18 勝海舟、前掲書、248頁。

19 伏見猛猪&阿部仁三『福澤諭吉』日本教育文庫、1940年、第40巻、29頁。

-
- 20 福澤先生研究会、前掲書、194 頁。
- 21 勝海舟、前掲書、152 頁。
- 22 多くの人の研究・議論にもかかわらず、未だに賛否毀誉が相半ばするこの問題について、伊藤正雄氏は下記の論文において広範な関係資料を提供している。
伊藤正雄、「『瘠我慢の説』私説—福澤諭吉の勝海舟批判是か非か—」、
『神戸女子大学紀要』No. 4, 1975 年、1-29 頁。
- 23 『全集』17 巻、31 頁。
- 24 福澤諭吉『福翁百余話』慶應義塾大学出版会、2001 年、324 頁。

(参考文献)

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 1. 福澤諭吉全集 第 14 巻 15 巻 17 巻 20 巻 | 岩波書店 |
| 2. 福翁百話・百余話 福澤諭吉 | 慶應義塾大学出版会 |
| 3. 福澤諭吉 小泉信三 | 岩波新書 |
| 4. 福澤諭吉 富田正文 | 岩波書店 |
| 5. 福翁自伝 福澤諭吉 | 慶應義塾大学出版会 |
| 6. 福澤諭吉の人と思想 福澤先生研究会 | 岩波書店 |
| 7. 氷川清話 勝 海舟 | 講談社学術文庫 |
| 8. 勝 海舟 松浦 玲 | 中央新書 |
| 9. 海舟余波 江藤 淳 | 文藝春秋 |
| 10. 勝海舟と福澤諭吉 安藤優一郎 | 日本経済新聞社 |
| 11. 瘠我慢の説 福澤諭吉 | 慶應義塾大学出版会 |
| 12. 勝 海舟傳 徳富蘇峰 | 改造社 |
| 13. 勝 海舟 石川 孝 | 吉川弘文館 |
| 14. 海舟座談 巖本善治 | 岩波文庫 |
| 15. 幕末・維新 井上勝生 | 岩波新書 |
| 16. 知られざる福澤諭吉 礪川全次 | 平凡社新書 |
| 17. 福澤屋諭吉の研究 長尾正憲 | 思文閣出版 |
| 18. 幕末史 半藤一利 | 新潮社 |
| 19. 勝海舟自伝 勝部真長 | 広池学園出版部 |
| 20. 瘠我慢の精神 萩原延寿&藤田省三 | 朝日文庫 |
| 21. 福澤諭吉 伏見猛猪&阿部仁三 | 日本教育文庫 |
| 22. 学問のすゝめ 福澤諭吉 | 岩波書店 |
| 23. 福澤諭吉と勝海舟 三谷太一郎 | 福澤諭吉年鑑 23 |
| 24. 福澤諭吉と勝海舟 富田正文 | 福澤諭吉年鑑 2 |